

< 翻 訳 >

W. B. イェイツ：
『幼年期と青春期の回想』
VI ~ XIII

日 下 隆 平

VI

< ハマースミスの学校, 1875-1880 >

校長は陽気で物事にこだわらない人であり牧師でもあったが、信仰の面でも節度のある人だった。そのことは万人の認めるところであった。校長が私たちのことで気にかけることがあったとすれば、私たちが体面を汚すのを心配したことぐらいであった。以前、母がデボンシャーで買ってくれた鮮やかなブルーのツイードのジャケットを着て学校に行ったことで鬨感をかったことがあった。私は二度とそのジャケットを着て来ないように言われた。校長は無駄だと知りながら、それでも数度生徒の両親にイートン校風の服を着るように勧めようとした。ある期間など私たちはしかたなく手袋をしていった。

学校での最初の年が過ぎると私たちはビー玉遊びをするのを禁じられた。ビー玉遊びは一種の賭事であり、不良少年たちがやっていたからだった。さらにその2、3カ月後には授業中に足を組まないように、と言われた。その学校は専門的職業人の子弟が集まる学校だったが、彼らの親の多くは職に就いていないか、職に就いて間がない者たちであった。だからある新入りの少年が薬剤師の息子であるとき少年たちは、その子の入学に対して学校に抗議した。(私は最初彼の唯一の友人であったと思う。) 私たちはみんな両親が実際よりも裕福であるふうを装った。母親が編み物や私の服の繕いを

していたのを見た或る少年に、私は「母は好きだからそうしている」と言った。私にはそれが必要に迫られてのことだとわかっていたけれども。

いま思うと、その学校はその種の学校によくみられるように、陰湿ないじめの場であった。学校では、大きな少年が、立てなくなるまで小さな少年を密かに殴ったり、性的な感情を抱くには幼すぎる少年たちが嫌らしい流行歌（はやりうた）を歌ったりしたものである。しかし、そこはもっと優れた学校より私には適していたと思う。校長が「だれそれ君のギリシャ語の成績はどうかね」とたずねると、担任が「点数はよくありませんが、クリケットでは頑張っています」と答えた。それに応じて校長が「それならそっとしておこう」と言うのを聞いたことがあった。私は学校の勉強が性に合わなかった。それでも何週間も熱心に勉強にあてたこともあったが、一晩に一学課を仕上げることがせいぜいだった。私はよく物思いに耽った。だが、いったん物思いに耽るとそこから抜け出るのは、まるで風の強いなかで倉庫に気球をしまい込もうとするようなものであった。成績はいつもクラスの底辺をうろつき、私はいつもその言い訳をしていたことでますます臆病になっていた。でも、どの先生も私に辛くあたる人はいなかった。私自身は蛾や蝶を集めること、上着のポケットや机に尻尾のない白い老ネズミを隠す程度の悪ふざけをすることで知られていた。

一度だけ私たちの静かな生活が邪魔されたことがあった。熱心だったがしゃべり方に癖があるアイルランド人教師が短期間雇われたことがあった。彼は優れたギリシャ語研究者であった。彼は授業を始めるときには、「さあ、始めるよ」とか、また校長が廊下を通りかかると、わざと聞こえるように「なんとも、この学校はよくない。聖職者が校長を務めるのは如何なものだろうか」などと言った。それから私の顔が彼の目にとまって立たせるとよく言った。「アイルランドの少年なら、どの子でもクラス中のイギリスの少年より優れていることがはっきりしているというのに、君が怠け者であるのは恥ずべきことだ」と。その後私はその言葉に苦しまなければならなかった。その教師は少女のような顔の少年を呼び出して彼の頬にキスをすると休暇にはギリ

シャに連れていくと話した。彼は少年の両親にその旅について手紙を書いたところ、休暇に入る前に彼は解雇されてしまったと、風の便りで私たちは聞いた。

VII

<二つの場面>

二つの場面が思い出される。私は運動場の隅にある木のとっぺんに登って学友たちを見おろしている。そして日の出に真っ先に鳴く3月の雄鳥のごとく誇らしげである。私は「このまま大人になった時も、今のように賢ければ有名人になれるだろう」と心の中でつぶやいた。思うに彼らも皆同じ気持だったのか、選挙の時には彼らの父親たちが新聞で見つけた記事を学校の壁一面に張っていた。私は芸術家の息子なのだから、芸術こそが人生の全目的なのだと考え、金持ちになってぬくぬくと暮らすことを、他の子のように、考えてはいけなのだと思っていた。

もう一つの場面はストランド街のホテルの室内に関するものである。そこではある男が暖炉に身体を丸めて暖まっている。彼は従兄弟だったが、もう一人の従兄弟のお金を投機に使い失敗してしまい、逮捕をおそれてアイルランドから逃げてきたのだった。父は夕べを共に過ごし彼の自責の念を少しでも晴らしてやろうとしたのだ。

VIII

<ラファエル前派とベッドフォード・パーク>

ベッドフォード・パーク¹は長年私の空想をかきたてるロマンティックな場所だった。ノースエンドにいた頃、父は朝食の時、この部屋のガラスのシャンデリヤは悪趣味だから取り外そうと言いだめた。そのしばらく後にノーマン・ショー²が建設中の街について語ったが、父によると、「そこは壁が周囲

を取り囲み、外のニュースが入らないほど外部と隔絶したところだ」と言ったと思う。ところが「(実際に住んでみると) 城壁も城門もなくして失望した」と私が不満をいうと、父は「理想の街の姿を述べたに過ぎない」と私に弁解した。私たちはディ・モーガン³の瓦、ピーコックブルーのドア、そしてモリスのザクロの絵の模様やチューリップの絵の模様を見てようやく気に入ったものに出会った気がした。今まで見なれてきた模造の木目・ヴィクトリア朝中期の薔薇が描かれたドア、曇った万華鏡を揺すって見えるような幾何学模様の化粧タイルは気に入らないのだと云うことがよくわかった。

私たちは絵の中で見たような家に住むことになり、また童話の中の人物のような服を着た人々にさえ出会った。街並みはノースエンドほどまっすぐで退屈ではなく大きな木のあるところでは木を避けて折れ曲がり、つづら折のたのしみを示しているのだった。そして鉄柵の代わりに木製の柵があった。全てのものが新しいこと、空き屋でかくれんぼをして遊んだこと、そしてその全てが物珍しいことなど、まるでおもちゃの中で暮らしているような気分させた。そこに住んでいる人々は皆幸せな生活を送っているように思えた。それはまるで、貧しい人々でさえも生き生きとし、家の主人が海に乗り出す不思議な冒険の話をしたころの昔の人々の暮らしぶりを想像するようなものであった。そこで造られていたのは趣味の良い家だけだった。商売目当ての建設業者がその家を模造して、安っぽくし始めたりしなかった。そのうえ、私たちだけは最も美しい家である芸術家の家を知っていた。

私は二人の妹と弟と一緒に低い赤煉瓦と瓦屋根造りの家でダンスのレッスンを受けていた。その家は、いつか船室風に造られた家で暮らしてみたいと憧れてきた長い間の夢を忘れさせるほど魅力的なものであった。水夫のシンドバッドが座ったかに思えるダイニングルームのテーブルはピーコック・ブルーに塗られていた。木製細工はすべてピーコック・ブルーであった。吹き抜けの壁には広く背の高い出窓があり、そこには上下階段とテーブルがあった。よく知られたラファエロ前派の画家であるその家の主には、二人の娘がいて彼らが私たちのダンスの先生となった。その娘たちと母親はピーコック・

ブルーの服を着てお伽話の一部と思えるほど簡素な装いをしていた。まじまじと老婦人を見ていると、父は「お前のお母さんがあんな装いをしているのを想像してごらん」とこっそり言った。その父は当時フランス芸術の影響を受け始めていた。

父の友人たちはラファエロ前派の影響を受けたものの自信を喪失した画家たちであった。私が思い出せる名前といえば、ウィルソン、ページ、ポッター (Frank Potter) などである。私が彼らに事をもっとも鮮明に憶えているのはノースエンドにいたときのことである。私は誰かがロセッティは自分の題材をマスターしなかったと言っているのを聞いたことがあった。ネットルシップ⁴はすでに人気画家となっていたけれども、父は彼の若い頃の絵の素描、とくに『悪を創った神』のことをいつも話した。ロセッティの父あての手紙の中で「古代と現代芸術の中で最も崇高な着想」と彼はその作品を誉め称えた。

当時父は仕事が無く仲間の誘いを受けないように、上着の後ろに綻びをわざと作っていた。すると母はそれを見て繕ってしまったそうである。しかし父は戻ってくるまでにすべての糸目を引き抜いてしまったということだ。ポッターの見事な出来映えの絵、『少女』(Little Dormouse) はテイトギャラリーに今はあるが、私たちの家に長い間飾られていた。ポッターの最愛の友は、私の記憶では、公立小学校で何かの仕事に就いていた可愛らしいモデル⁵であった。私は彼女がノースエンドのスタジオの椅子の傍らに片手に本を持って座っていたのを思い出す。そして父は彼女がラテン語を復唱するのを聞いていた。彼女は当時の絵画に見られた優美で丸みをおびた顔をしていた。そして実際に彼女も理想美を作りあげるのに一役買ったに違いない。私は(父の所有していた)『地上の楽園』の白紙のページに鉛筆で彼女の顔が描かれているのに先日気がついた。

その数年後ベッドフォード・パークにいた頃、私はバーンハムビーチスで知り合いになったファラー (Farrar) からポッターの死亡と埋葬のことを聞いた。ポッターはとても貧しく半ば餓死で亡くなった。彼はよく用いられる

言葉だがパンと紅茶だけで長い間生活したために、胃はしぼんで小さくなってしまっていた。彼の親戚が彼に十分な食べ物を与えたときにはすでに手遅れだった。葬式に出席したとき、ファラーは最前列の裕福な人々の背後にいと、最前列の一人が葬儀馬車の後を少し離れ泣きながら歩いているモデルを指さし、「あれが彼のお金を一切合切持っていった女だ」と言っていたのを聞いたという。彼女は何度も彼の借金を払わしてほしいと頼んだが、彼がそうさせなかった。おそらく彼の友人の中で、金持ちは貧しい者を責め、また逆に貧しい者は金持ちを責めたのであろう。そして誰も詳しい事実を知らなかったから助けることができなかったのだと思う。まして、彼には変わった浪費癖があった。私は「彼は子供を熱愛する面があったが、その中のある子供に興味を抱くようになり彼のお金をその子の教育に使ってしまったのだ。—彼の『ダーマウス』という絵はある子供の肖像画である」と誰かから聞いたことがあった。私の妹の話だが、彼が右手に黒ずんだ手袋をして絵を描いたのを見たという。そのことについて、ニスが多量に使うため、手袋をしななければ、ニスで手が汚れて描きにくいのだと彼が言っていたらしい。「僕はやがて黒ずんだ色で顔を描かなければならならぬだろう」とつけ加えたともいう。しかし私の記憶にもっとも残っているのは、父がいつも座らずあちこち歩きながら描いていたのに対して、彼はイーゼルの前に座ったままであったこと、彼の絵の背景にはいつも私に影響を及ぼした色、ダークブルーがあったことである。

ウィルソンの作品は彼の故郷のアーバーディーン（スコットランド）の公立美術館にある。妹たちはたくさんの彼の風景画（大部分は森の風景だが）を所有している。それらの絵は倦怠と憂鬱それに最後の局面まで続いたロマンティックな画風で描かれていた。

IX

＜幼年期の読書＞

父が初めて詩を読んでもくれたのは私が8歳か9歳頃のことであった。スライゴーとローシズ岬との間に荒々しい草で覆われた岬があった。またそこは海または潮の状態によってはぬかるみの中に迫り出している。そこは死亡した馬が葬られる場所でもあった。そこに座って父は『古代ローマの詩』⁶を朗読してくれた。その詩は馬屋の少年がオレンジ党員の詩を読んでもくれて以来、初めて私を感動させたものであった。後になって父は『アイバンホー』や『最後の吟遊詩人の歌』⁷を読んでもくれた。それらはいまなお私の記憶の中に生き生きとしている。先日のことだが私は『アイバンホー』を再読した。しかし冒頭に出る奴隷の豚飼いのガース、それに聴聞僧タックと彼の鹿肉パイという幼年期に私の心を捕らえて離さなかった二つの場面以外に、全てを忘れてしまっていた。『最後の吟遊詩人の歌』は魔術師に変わりたいという願望を私に与えてくれたが、それは（英雄の如く）海辺で何者かの手に掛かり死ぬという長年の夢と匹敵するものになった。

私が初めて学校に行ったころ、父は少年新聞を読むのを禁止しようとした。父の説明によると、新聞とは本来平均的な少年や大人向きに作られているので、成長を妨げるものになることがある、というのが彼の主張であった。父が新聞を取り上げたので、私は『イーリアス』を子供向きに書き直したものを讀んだところで、とうてい楽しめるはずがなかった。2、3カ月もすると父は私の勉強のことを心配しあれこれ強要しなくなった。そして私の物覚えが悪くても暴力を振るうことがなくなり、私の読むものを注意することもやめた。その後少年新聞が発行される水曜日の午後には私の学友たちの間に行き渡る興奮をともに味わうことができたのだった。私は限りないほど多くの物語を讀んだがそのほとんどを忘れてしまった。それはスライゴーで私が讀んだグリムの童話、そして母が私や妹たちに讀んでもくれた『みにくいアヒル

の子』以外にハンス・アンデルセンの作品を全部忘れてしまったのと同様であった。漠然と覚えているのだが私はグリムよりもアンデルセンの方が好きだった。なぜならグリムには馴染みにくいところがあり、私が憧れてきた騎士やドラゴンそして美しい女性たちが登場しなかったからである。私は自分が見聞きしたもの以外に読んだものをほとんど覚えていない。私が10歳か12歳のときアービング（Henry Irving 1837-1905 英国の舞台俳優、シェークスピアの芝居で有名）の演じる『ハムレット』を観に父は私を連れていってくれた。父はエレン・テリー（Ellen Terry 英国の女優で演劇作家、アービングの相手役）よりアービングを私がなぜ好きなのかわからなかった。今思えば、当時彼女は父や彼の友人達のアイドルだった。私はアービング演じるハムレットには、自分と同一視することはできても、彼女にはそうすることはできなかった。また、女性の魅力や美しさに惹かれるにはまだ幼すぎた。長年の間ハムレットは青年期までの時期特有の気取りとも言える英雄的な沈着さのお手本を示していて、私の内面的葛藤そのものを表していた。

父はショーサーの『カンタベリー物語』の中でユダヤ人によって殺される幼い少年の話とトパス卿の物語を難しい言葉には説明を交えながら読んでくれた。そしてどちらの話にも私はわくわくしたがトパス卿がいちばん好きだった。しかし、その話が未完で終わっていることには失望した。私が成長すると、父はバルザックの小説中の挿話や登場人物を用いて深い人生批評を行いながら、小説の筋を話してくれたものだった。いま私は『人間喜劇』を全て読んでみると、所々には不自然な強調があったり輪郭がゆがんだりして均衡を欠いていることに気づいた。そして、若いジャーナリスト、ルシアンが主人を裏切った後決闘する場面を、父がある郊外の通りを歩きながら話してくれたこと、そして怪我を負ったルシアンが誰かに決闘相手は死んではいないと言われると「最悪の事態だ」とつぶやいたことを私は思い出すのだ。

いまでは私は友人たちと自分の思想や感情をまずまず分かち合えるとはいえ、それでも彼らとの違いを絶えず自覚している。しかし当時私は自我に目

覚めるまでは、彼らと心も身も一体となって冒険をともしることができた。友達たちが計画し一緒に行動するとき心は一つとなり最後の隠し事さえ消え去った。私はスポーツの試合では役に立たなかった。フットボールやクリケットで得点したことなどを思い出すことはできない。けれども、私がスポーツマンの友人や名の知られた二人の悪戯者達（顔は忘れ、名前しか覚えていないが）とリッチモンドパーク、コンビーウッド、トゥイフォードアベイに出かけて蝶、蛾、そしてかぶと虫などを探したときなど、私は実に豊富な知識をもちあわせていた。

今日でも昼食や夕食をしているときに、その話しぶりにふと聞き覚えのある人にときどき出会うことがある。すると突然昨日のことのよう、私は猟場の番人が彼の家の裏の植林地から私を追いかけてきたこと、ある珍しいかぶと虫を探そうと放牧場に出かけ、そこに生息していると思って牛の糞をひっくり返したことなどを思い出すのだ。そのスポーツマンは私たちの見張り人でフットボールのセーフティマンのような存在だった。（フットボールで守備陣の最後尾に位置する者）もし私たちが道で馬車に出会うとあたかもトイレに行こうとするかのように帽子をとって歩き続けてはどうかと、彼はもちかけた。またあるとき、コンビーウッドで猟場の番人に見とがめられたときなど、兄を説得して少年たちを散歩に連れてゆく教師のようなふりをするように、彼は説いたりもした。そして猟場の番人は法を盾にとって言うことはなかったが、代わりにくどくどと文句を言った。その場所（窪地には小流があり、それはウィンブルドンの公有地から記憶に楽しくよみがえるコンビーの森に入り込んでいる）がどんなに魅力的であろうとも、これら仲間の少年たちは私の知る由もないもっと深い森の魅力を知っていたことだろうと思う。私はそこではよそ者だった。彼らだけがわかる地名の呼び方には、私をそんな気持ちにさせるような何か独特なものがあった。

X

＜スライゴアの風景＞

私は休暇でスライゴアへ帰る途中にリバプールのクラレンス盆地（クラレンス・マンガ⁸の名前は、その波止場に由来する）に着くと、私はスライゴアの人々に囲まれているように感じた。私が幼い子どもの頃、リバプールに鳥かごを持ってやって来た老婦人は私が辻馬車から降り立つとすぐに私に抱きつき、荷物を持ってくれた水夫に「この子が赤ん坊の頃には、私はこの子を腕に抱いたもんだよ」などといったのでほとんど困ってしまった。水夫もまた私のことをよく知っていたと思う。というのは私は玩具のボートを走らせるためにスライゴアの埠頭によくいったことがあったからだ。そして祖父や彼のパートナー、ウィリアム・ミドルトンが取締役になっている会社の蒸気汽船スライゴア号やリバプール号に毎年一、二度乗船したからだ。私は乗るのがリバプール号であればいつも喜んだ。なぜならその船は南北戦争の間にすばやく封鎖をくぐるために建造されたからだ。

私はわくわくしながらいつもこの航海（スライゴア・リヴァプール間の）を待ち望み、その航海を他の少年たちに自慢した。私が幼い頃、水夫が歩いているのを見かけたときは、しっかりした足取りで歩いたものだ。（スライゴア・リヴァプール間の航海で）私はよく船に酔ったが、このことを他の少年たちに、また自分自身にさえ隠そうとした。けれども、その航海のことについてほとんど何も覚えていない。

しかし、船長や一等航海士が語った物語、ドニイガル地方の断崖の風景、そしてアイルランド語を話しながら夜であれば注意を引くために赤々と燃えるターフを燃やしながら蟹を持って現れたトーリー島の男たちなどを私は思い出すのだ。がっしりとした肩をした髪が生え際が白くなった老船長はやや持て余し気味だった一等航海士にリバプールの浜辺で彼が経験した戦いについて話したものだ。たぶん幼少の頃、神は水夫のように強いのかと祖母に尋

ねたときに、その船長の姿を私は思い浮かべていたのだろう。いずれにせよ、かつて彼は難破しそうになったことがあった。リバプール号のシャフトが折れてギャロウェイ岬に吹き寄せられそうになった。船長は航海士に言った。

「よいか。ぶつかったとき海に飛び込め。落ちてくる帆柱の下敷きにはなりたくないからな」。すると航海士が「私は泳げません」と言うと、船長は「荒れ狂う海で5分間も浮き続けることなど誰だってできるものか」と答えたという。船長はその航海士がもっとも臆病な質の男であったこと、何かにつけて波止場の娘たちの笑いものになったことなどをよく話したものだ。

祖父は彼自身の船を与えたことが一度ならずあった。しかし彼は安心できる昔の船長との航海を選んで、自分の船から下りてしまった。かつて彼はリバプールの乾ドックに船を入れていた。スライゴーで、ある少年が溺死するという出来事があった。ところが、その知らせが彼のところに届くはずがないのに、彼は妻の所に「(少年の) まぼろしだ。すぐ助けてくれ。そうでないと船を下りる」と電報を打ったという。彼には遭難の経験が何度となくあり、たぶんそのせいで神経を病んだのか鋭い感性をもちあわせていたのかもしれない。それが不可思議な趣味と教養を与えることになったのだろう。私はかつて甲板のシートに『パリのロバート伯爵』という本を置き忘れたことがあった。そして私がそれを再び見つけたとき彼の汚れた親指の指紋がいたところに付いていた。また彼は「死の馬車」を見たことがあったという。彼の話では、その馬車は道路に沿ってやって来ると、小屋の後ろを通ったがそこから出てくることはなかったということだ。

海の思い出はつきない。陸からかなり離れたところの海上でかつて嗅いだ刈ったばかりの干し草の匂い。一度は私がツノメドリを見ていたとき（水夫はパフィンと呼ぶ）その鳥たちがそれぞれ違った方法で頭を羽の下に引っ込めることに気づいたこと。私はそれがおもしろくて船長に「鳥にも違った性格があるのですね」と言ったこと。私の父もときどきやってきた。すると水夫たちは父が乗船するのを見かけると「ジョン・イェイツがいる。これは嵐になるぞ」といったものだ。父にはツキがないと考えられていたことなど。

私はもはや閉ざされた空間を好きではなくなっていた。また祖父が住んだマービルにある厩舎の庭に、あるいはミッキー叔母さんが住んでいた切妻壁に覆い被さるような低い林を好きではなくなっていた。そして私はお供に馬丁を連れて時には山に登ったり、その地方の歴史の話を調べたりし始めた。私は山のせせらぎでミミズを餌にマスを釣ったり、夜にニシンを釣りに出かけた。祖父はイギリス人がエイを食べるのは理に適っていると言ったので、ローシズ岬からほぼ6マイルもエイを持って帰ったところ、祖父は食べてくれなかった。ある夜沿岸警備隊の船で家に帰ろうとしていたとき彼岸嵐が吹いてきたとき、ある少年が私にポーの『黄金虫』から迷い出たような純金の甲虫が何者かにスコットランドで発見されたと話した。彼の話聞いて、私たちのどちらも信じて疑わなかったと思う。実際に波止場沿いやスライゴーとローシズ岬の間を運行する小型汽船の船員部室の火を囲みながら、水夫たちから私はとても多くの物語を耳にした。また一緒に魚釣りに出かけた少年たちから世界には不思議な生き物と驚きに満ちていることも聞かされた。イヤリングをつけた外国の水夫たちから私は物語こそ聞くことはなかったが、話をしてくれた魚釣り仲間たちに対するのと同じ様に、驚きと賞賛の入り混じった気持ちで私は彼らをながめた。

私の弟の絵画『メモリー・ハーバー』⁹——古地図を見るように、家並み、錨を降ろした船、離れたところにある灯台などすべてが一体となっている——を見ているとき、私は白シャツ姿の人々に混じり、紺色の制服姿の男を見つけた。彼は私と釣りをした水先案内人だった。そうわかると、心は平静を欠き、気持ちは高ぶるのである。そして、私の気持ちは、優れた詩が何故もっと多く作れなかったかと反省すると、ふさぎこんでしまう。今まで私はシンドバッドの黄色い浜辺（お伽噺の世界）を歩くことを夢想してきたが、今後それ以外のことを夢見ることはないだろう。

私はまだ赤毛の子馬を飼っていた。ある日、父が乗馬に私のところにやって来たときにはとても厳しく指導した。父は私がいっこうに乗馬が上手にならないので業を煮やし厳しくしたのだった。父は「お前はほかのこともそう

だが、ポレックスフェン家の者が重んじていることは何でも上手にできなければならない」と諭した。彼は私の勉強についても同じことを言って、数学を得意にするようにと言ったものだ。今思うに、父には精力的に成功した人々の間であって劣等感を抱いていたところがあるようだった。あるポレックスフェン家のものが言っていたことだが、彼自身は乗馬が下手だったがどんな獵にでも参加し馬でどんな溝でも飛び越そうとしたものだった。ダウン州の教区牧師であった祖父は上品な男で学者だったが、その日の獵に行くために鞍に乗るまでに三度も乗馬ズボンに裂いたほど、ぴったりしたズボンをはいた洒落者の騎手だったこと、さらに、祖父の首席牧師は「副牧師を望んでいたのに、私のところに寄越されてきたのは騎手だった」と嘆いた話を聞いたこともあった。

自分の思うようにさせられたこともあり、乗馬の腕をみがこうともしなかった。だが、何度も落馬したものの、大叔父マットの住んでいたバスブランには他のどの場所よりもよく出かけたものだ。彼の子供達と私は家の前で、玩具の大砲の火口に導火紙を詰めて武装させたボートを走らせた。そしていつもそれらの船が渦を描いて旋回するのではなく、互いの船が大砲を発射することを願ったがいつも失敗に終わってしまった。

私はクリスマス休暇にスライゴーに時々出かけたと思う。私は獵に赤毛の子馬に乗って行ったのを思い出すからだ。その子馬は最初の跳躍で急に後込みをしてくれたので、私は内心ほっとした。子ども連中が取り囲んで子馬を打ち始めると、私はそれを許すことができなかった。子供達は臆病者呼ばわりし私を馬鹿にした。私は裂け目を見つけるともう一度溝を跳躍しようと試みたが子馬はまた跳ぼうとしなかった。やむなく私は子馬を木につないでシダの間に寝転がって空を見上げた。家に帰る途中で狩りの一行に出会うと、そこにいる者たちがみんな獵犬を避けていることに気づいた。その理由を知ろうと、道の真ん中で獵犬が集まっている場所まで子馬で進み立ち止まると、みんなが私に囃したて始めた。

私はダーガン城に馬で行ったことがときどきあった。そこには私のミドルトン家の従姉妹の一人と結婚した短気な小地主が住んでいて、一度、従兄弟のジョージ・ミドルトンとそこを訪ねたことがあった。そこは100年前のアイランドの没落する姿を示す最後の家といえよう。だが、私は小さな湖に向かい合っている二つの廃墟、ダーガン城とフィアリー城が、そのロマンス故に好きな場所だった。ダーガン城の小地主は、18世紀のあるときに彼の家族と城を離れその近辺で小さな家に住んでいた。かたや、ふたりの老フィアリー嬢（フィアリー城の）はスライゴーに小さな家を借りていた。彼らも地主階級の没落を示すもう一方の名残であった。

毎年一度、彼は2人の老婦人のためにダブリンまで馬車を走らせて、父祖の墓を訪ね、かつての栄華を懐かしんだ。彼は荒々しい何頭かの馬に軸棒を取り付けわざとスリルを楽しんだものであった。

彼（小地主）自身想像力を働かしても、活気のない毎日のどこに刺激を求めてよいのやらわからなかった。私がそこに行った最初の日、彼は従兄弟のミドルトンに（道路上で）拳銃を見せびらかして、目の前のにわとりを撃ってみせた。その三十分後には螺旋階段のある壊れかけた塔にすぎない城の湖畔で、対岸を歩いている老人のほうに拳銃を向けて撃った。その翌日彼がウィスキーを一瓶かたむけながら、その老人に昨日の件で謝っているのを聞いた。だが二人とも上機嫌であった。ある時、彼は私の臆病者の叔母に自分の最新のペットを見たいかどうか尋ねたことがあった。そしてすぐさま玄関から競走馬を引っ張ってきて食堂のテーブルのまわりを走らせた。またある時は彼が悪ふざけをして窓を開けて猟犬を中に入れ朝食を食べさせたので、叔母はテーブルクロスをはずしたことがあった。射撃名人の誇りにかけてそのノッカーを打ち落とすまでマティーニ・ヘンリー銃で自分のドアを撃ち続けたという話もよく知られている。最後には彼は大叔父のウィリアム・ミドルトンと諍いを起こすと粗暴な田舎の若者たちを集めて自分の恨みを晴らそうとした。彼とその若者たちは彼が手に入れた衰弱して動けなくなった荒馬にのって土地同盟の幟旗をあげてスライゴーを行進していったという。その後、友

人も資金もなくなり、オーストラリアかカナダに逃亡していった。

私はダーガン城でカワカマスを釣ったり、先込め式の銃で鳥を撃ったりしているとき、猟師に撃たれたウサギの鳴き声を聞いたものだった。それ以来私は物言わぬ魚しか捕れなかった。

XI

<ホース岬——ハーコートストリートの学校>

私たちはベッドフォードの家を畳んでダブリン近郊のホース岬にある長い茅葺きの家に移った。土地戦争は当時頂点に達し、何代にもわたって我が家の所有であったキルデア州の土地もわれわれの手から去ろうとしていた。地代はますます下がってきていた。幾ばくかの税金を払うために土地を売るか抵当に入れなければならなかった。¹⁰ だが父と小作人との間には悪い感情はなかった。地主と小作人の関係がもっとも険悪なときでさえ、ある老小作人は父の猟犬を彼の家に預かったり、毎年の年貢料以上の世話をしてくれた。その男は炉端の最上の場所をその犬の気持ちがいいように空けてくれていた。そして家の中に犬が入ってくると、その男は誰かそこにいれば犬のために必ずその場所を空けさせたものだった。そして土地を売ってからかなり長い間、この老人と彼の息子の間での諍いの仲介役に父が呼ばれたことを思い出す。

当時私は15歳だった。父は絵画を断念したくなかったので、私にハーコートストリートの学校に行くように勧めた。その学校は鉄の柵に囲まれ、その向かいには長い広告板とむさ苦しくけばけばしい鉄道の駅がある、うらさびしい18世紀の建物であり、泥と小石だらけの小さな運動場があった。まもなく私は誰も礼儀正しさに注意を払おうとするものがないのに気づいた。私たちはうるさい声の鳴り響く中で勉強した。私たちの日課は朝祈禱からを始めたが、校長は気分しだいで、授業の開始時に教会や牧師（英国国教会）のことをばかにすることもあった。「牧師たちにキリスト教がどのようなものであるか言わしてごらん。（神は万物を作ったと言うが）地球は太陽の周りを

回っているのだよ」。

その一方で、学校にいじめはなかったものの、少年たちがまじめに勉強できるような環境とはとうてい言えなかった。禁止こそされていなかったものの、クリケット、フットボール、それに蛾や蝶の採集などの面では失望してしまった。それらは怠け者の少年のすることであった。私には以前のように多くの学友がいなかった。というのは教室の外で共有する生活がなかったからだ。私は学業を自分の博物学の勉強を邪魔するものと思い始めるようになった。しかし、私が学業以外の本を一度も開かなかつたにしても、学校の宿題をその4分の1だってできなかつたはずだ。ユークリッド幾何学については、私はいつも、他の少年たちが黒板の前でまごついている間にその問題を解けるほど、得意だった。ユークリッドの成績で、私はクラスのビリからトップになったこともあった。しかし彼らにも同じく生まれながらの才能があった。彼らはラテン語の初歩読本を終えると原典で4巻、5巻を読むのではなく、彼らは要領よく現代語訳を用いた。だから私も辞書を頼りに10行余りのヴェルギリユウスを読むのではなく、今度は英語訳を用いて、150行もの詩を暗唱することを求められた。他の少年たちは訳本を丸暗記し、ラテン語と英語のどの言葉が互いに一致しているかを記憶することができた。しかし（原文で）読まなかつた箇所が出来事を知ろうとしたせいで、私はつまらない間違いをやってのけた。私は興味をもてなければ決して勉強をしないのに、70の年月が羅列された年表にすぎない歴史の授業に、どうして満足することができたであろうか。私は文学ではとりわけ悪い成績であった。というのも、私たちはシェークスピアをもっぱら文法理解のために読んだからだ。

ある日、私によい考えが浮かんだ。というのはその日の最後の授業では、以前に習ってきたことや、前夜までに暗記しておくべきだった課題など、とても多くの学習をすることになっていた。しかし何週間もそれらのどれ一つとして理解していなかつたので、私は許可も得ずその時間をずる休みすることにした。その結果それが知られて、私は（その授業担当の）数学の先生に

宿題を出してもらうように頼もうとしたが、誰も口添えをしてくれなかった。

父は私の勉強に口を出すことがしばしばあった。たいてい、私は父のラテン語の授業を受けるというさんざんな結果になった。「でも僕には地理学もしなければならぬのです」と言った。それに対して父は「地理学などは習うものではない。それは精神の訓練にはならないのだ。おまえは一般的な読書をする中で必要とするものを全て選び取りなさい」と答えたものであった。そして歴史の授業についても彼は全く同じことを言ったものだ。そして「ユークリッド幾何学などは簡単すぎる。ユークリッドは文学的な想像力の持ち主だと自然にわかってくるのだ。それが精神のよい訓練となるという昔の考え方はとっくの昔に否定されたのだ」と父は言ったりもした。ちょっとした噂になるほど、私はラテン語をよく知っていた。そして噂になった後何週間か、私は賢明な生徒だが、実は怠けものなのだ、という評判となった。彷徨い続ける私の心をも制する恐怖を味わいながら、私がラテン語を学んだと言う事実を、誰一人として知らなかった。私は何かの時に父を真似たことがあったに違いない。というのは、「君のお父さんのところへ行って反省課題をあげるわけにはいかないから、君に与えようと思う」と先生が言ったのを記憶していたからである。

私たちはエッセイを書くように求められたことが時々あった。筆跡やつづり字で審査されたこともあって、私は賞をとらなかった。だが、私のエッセイがちょっとした物議をかもしたことがあった。そのことで、ある教師の前に呼ばれて、そのようなことを私が実際に信じているのかどうかを尋ねられたことがあった。だが私は尋ねられたこと自体に憤慨した。なぜなら、自分の人生での信条、父の語った言葉、父が友人と交わした会話などの思い出を、私はそのエッセイで書いたに過ぎなかったからである。「人間は過去の人物を踏み台にして立ち、より高きところに到達する」というエッセイを書くことを私は求められた。父は、そんなことには全く関心のなかった母にまで、その主題を読んで聞かせた。「そんな風だから、少年は自分に不誠実になり実を欠くのだ。理想は情熱を失わせ、人々から人間性を取りさるものになる」と

父は言った。彼は怒って雄弁に話しながら部屋の中をあちこち歩いた。そして私にそんな主題について書くのではなく、「おまえ自身に真を尽くせば、夜が昼に続くように、他人に不実を働けなくなる」¹¹（『ハムレット』）というシェークスピアの詩行について書くように言った。またあるときには義務についての考えをこき下ろした。「申し分のない女性が融通のきかない夫を軽蔑しているかを考えてごらん」といったものだった。そして母はそんな男を心底軽蔑していると、父は私たちに語りもした。たぶん、そのような考えを当然としている人も中にはいるが、そのような人はあまりおもしろ味のないような人たちだ。今でも私は父の言ったことは皆正しいと信じている。しかし父は私を学校から引き離すべきだった。（もし私が学校を止めていたなら）父からギリシャ語とラテン語だけを教わって、いま私はまずまず教養のある人間となっていただろう。また、（原文を読むことで）ひどい機械的な翻訳で私の血肉となった書物に無用の憧れを感じる必要もなかったであろう。また、弁解と言ひ抜けを考えながら学校という権威に怯えびくびくして向かう必要もなかったであろう。結果的には、言ひ抜けと弁解はビーバーの巣作りの本能にも似て、生きるための知恵であった。

XII

<ロンドン時代の学友>

私のロンドン時代の学友である運動好きの少年は夏を私たちとともに過ごした。しかし、行動と冒険に基づいた少年時代の友情はそろそろ終わりに近づいていた。その頃もお彼はあらゆる運動で私に勝っていて、今も不愉快な思い出となっている岩場に私たちはよじ登ったことがあった。しかし、以前から私は彼のことを批判し始めていた。ある朝、ランベール島（ダブリン州のアイランド東南の島）への舟旅を持ちかけたところ、彼が昼飯を食べられないと言ったので、私は彼を軽蔑してしまった。私たちは小さなボートの帆を上げて9マイル以上もボートを快調に走らせるうちに、人馴れしたかも

めのいる島の岸を見かけた。そのうちに、沿岸警備隊の息子である2、3人の青年たちが服を着たまま水に入ってきて私たちを陸に揚げてくれた。何かの本で読んだ野蛮人がするように、私たちは燦々と日の照る浜辺で一時間過ごした。「ずっとここで過ごせたらよいのに。いつか実現したい」と私は言った。私はいつも全人生を過ごせる場所を見つけようとしていた。家に向かってボートをこぎ始め、そして夕食の時間に約1時間遅れた頃、その少年はボートの底に空腹のあまり腹痛で体を折り曲げて横になっていた。私は彼とそしてまるで時計のように胃が時を打つ彼の同国人までも軽蔑した。

また私たちの博物学は私たちを引き裂き始めた。私は岩のある穴に生息する生物の12ヶ月にわたる変化についていつか記録を書きたいと計画していた。そしてどんなものかは思い出すことはできないがイソギンチャクの色に関して私自身のある理論を持っていた。そしてずいぶんとためらい悩み当惑した後、私はアダム、ノア、天地創造の7日間のことを反駁する議論に夢中になっていた。すでに私はダーウィン、ウォーレス、¹²ハックスリー、¹³さらにはヘッケル¹⁴などを読んでいた。だから休日の時間を、ある敬虔な地質学者を困らせることに費やしたものであった。彼はギネス醸造所の仕事がない時にはハンマーを手にホース岬の絶壁に化石を探しにきていた。私は彼に「いいですか。どこそこの人間の化石はそれが見つかる地層から考えれば、どうしても5万年以上も前のものです」と言ったものであった。そうすると彼は「それらは例外だ」と言ったりもした。そして私は「アッシャーの年代記」¹⁵に反対して自分の立場を力説すると、彼は二度とその話題について話さないでくれと私に頼んだ。「僕は君の言うことを信じるならば、正しい生き方ができなくなるだろう」と言った。

しかし私は前からの友人であるスポーツ好きの少年とは議論すらもしなくなった。なぜなら彼はその頃もお冒険のためだけに、そして名前以外には何の興味も持たずに蝶々を採集していたのだった。私は彼の知性を批判して、「君の博物学は、切手収集の趣味と同じほど科学と無縁のものだ」と、彼に

言い始めた。ロンドンで過ごした学校生活の間でさえ、たぶん父の影響を受けたせいだろうが、私は郵便切手の収集を見下していたのだった。

XIII

<1881年ホース岬>

(ロンドンからダブリンに) 転居した最初の約1年間、私たちは岸壁にある家に住んだ。嵐の夜には、水しぶきが飛んでベッドが水で濡れたものだった。私が窓からガラスを枠ごと全部取り外していたせいだ。戸外の新鮮な空気を入れて考え事に耽る癖が、もう少しの間続いた。それから、1、2年すると私たちは港を見下ろせる家に転居した。漁船の一团が港に出入りする様はそこから見下ろす見事な風景だった。

私たちには、漁師の妻である常勤の使用人が一人と、臨時雇いの大柄で赤ら顔の娘も時々手伝いに来ていた。その娘は私の母が教会に行っている間に、まるまる一瓶のジャムを食べてしまうと、その罪を私になすりつけたことがあった。そのような雇い方をこの頃以後もかなり長く続けたが、その後、あることが切掛けとなって止めることになった。ある日父が台所に偶然入ってゆくと、その当時臨時に雇っていた娘が使用人と別れるのを涙ながらに悲しんでいるのを見て、「二人を別れさせない」と父は約束した。

私は母親のために港に住んでいるのだと思っていた。私たちが子供であったとき彼女は海岸には更衣小屋があると聞いたためにそこに私たちを連れていくのを嫌がった。でも母は生き生きとした漁村の雰囲気が好きだった。私が母を思い出すとき、興味のあるような家の外の話についてのみ——ホース岬の漁師たち、ローシズ岬の水先案内人や漁師たちについて——漁師の妻である使用人と台所でお茶を飲みながら母が語り合っていたのをいつも思い出す。母は全く本を読まなかったが、母と漁師の妻は突然感情を込めたり、風刺のところではともに笑ったりしながら、ホメロスが語ったかに思えるような物語をお互いに話し合ったものだった。『ケルトの薄明』の中に「村の幽

霊たち」という物語がある。それはそのような午後を記録したものに過ぎない。だが多くの素晴らしい物語はメモを残す間もなく消えたので、私の記憶にはもはや残ってはいない。

父は私や姉妹にいつも母のことを褒めていた。なぜなら母は本当に心に感じることを以外に語らなかつたからである。父への手紙で母は移ろいゆく雲に喜びを見いだしていることを書いた。しかし絵は好きでなかつた。そして父の絵を展覧会に見に行くこともなければ、作品の出来映えを見に毎日スタジオに足を運ぶこともなかつた。それは当時も結婚した頃も変わりはない。私はこの頃のことをすべてはっきりと憶えている。しかしその後、母が卒中の発作で他界するまでのことについてはほとんど憶えていない。そして死ぬことによって母はお金の心配からようやく解放されて、ロンドンの窓辺で鳥に餌をやるという確かな幸福を見つけだした。父は彼女には強さがあつたとよく言ったものだったが、それは彼の褒め言葉であつた。そしてそれに「貧しさから詩人が生まれることがあつても、浪費から子どもが詩人になることはない」という言葉を父は付け加えた。

*本稿は、桃山学院大学総合研究所『国際文化論集』第17号（1998年2月）の掲載文（『幼年期と青春期の回想』I-V）に続くものである。

翻訳には *Autobiographies*. London: Macmillan, 1955. を使用した。1926年に『自叙伝集』は『幼年期と青春期の回想』と『垂絹のゆらぎ』の2編を収録して出版されたが、その後他の4編が加えられて現在のものとなった。

原題：*Reveries over Childhood and Youth*

注

- 1) この頃まで住んでいたブレナムとは違って、ホイッスラー (Whistler) の「ピーコック・ルーム」を想起させるピーコック・ブルーの家、シンドバッドが座るようなテーブル、曲がりくねった小道など、そこは当時のイェイツの空想を刺激して止まないものであつたとイェイツは回想している。1914年、父への手紙で出版される『回想』について、ベッドフォード・パークを“the first effect upon me of Bedford Park and all it meant in decoration”と表現している。

ベッドフォード・パークは建築家のノーマン・ショーによって建設された鉄道路線に沿って開発されたイギリスで最初の郊外住宅都市であり、樹木などは可能な限り残す方針で開発されたと言われる。従って、小道は木を避けるように所々で折れ曲がってつくられた。ベッドフォード・パークはイエイツの記憶のなかにある夢の空間であった。イエイツとラファエル前派との感連については、拙稿「W. B. エイツと挿絵画家—デュラックとイエイツ」、『現代演劇の展望』（桃山学院大学総合研究所研究叢書、1999年）参照。

- 2) Shaw, Richard Norman (1831-1912), 忠実な中世風建築の復興ではなく、その要素をピクチャレスクな雰囲気を生み出す効果として利用した。オールド・イングリッシュ様式 (Old English Style) として知られる。
- 3) De Morgan, William Frend (1839-1917), 英国のラファエル前派の陶芸家。
- 4) Nettleship, John Trivett (1841-1902), 挿絵画家, 法律家, 作家。彼の初期の作品の影響をイエイツは受ける。後に彼は *The Countess Kathleen and Various Legends and Lyrics* (1892) の初版本の口絵を描いた。
- 5) アイルランド人とイタリア人との混血の少女, ネリー・ウエラン (Whelan, Nelly)
- 6) *The Lay of Ancient Rome* (1842). Thomas Babington Macaulay (1800-59) によるバラッド
- 7) *The Lay of The Last Minstrel*. (1805) *Ivanhoe* 同様に Sir Walter Scott (1771-1832) による作品
- 8) Mangan, James Clarence (1803-1849), ダブリン生まれの詩人, 翻訳家。飢饉に苦しむ国土を歌った。
- 9) *Memory Harbour*, 末弟 Yeats, Jack Butler (1871-1957) によるスライゴーの風景と人々思い出させる絵画
- 10) イエイツ家はキルデア農場の地代が滞納されたことによる財政上の理由で、1880年アイルランドに帰った。
- 11) 『ハムレット』第1幕第3場でポロニウスが息子レアティーズに与えた処生訓の一部
- 12) Wallace, Alfred Russel (1823-1913), 英国の博物学者
- 13) Huxley, Thomas Henry (1825-95), 英国の生物学者。ダーウィンを支持
- 14) Haeckel, Ernest Heinrich (1843-1919), ドイツの生物学者
- 15) Ussher's chronology, アイルランドの神学者 James Ussher (1581-1651) による聖書年表, 『ユダヤ史年表』 *Annals of Veteris et Novi Testament* の中の一部分